

龜谷
行編
修身兒訓

浪華文會藏版

二

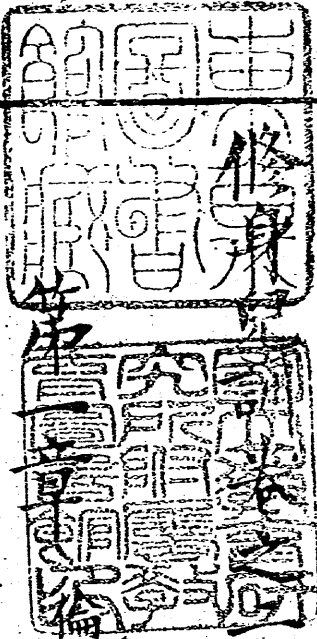
東 京 圖 書 館				
			八	新
			十	書
			之	門
			部	
冊	號	架	函	類

K1101
34
2

龜谷省軒編

脩身兒訓

大阪 浪華文會藏版



龜谷行編 常

○人の實學も五倫上より做し起
まをことを要に。傳家寶

○凡そ天地父母主君聖人此恩ハ
相並びて重し。此四恩を忘る者ハ

人ふあらば。大和俗訓

○君も仕つても。忠を盡し私哉忘
ま。我が身を顧ること勿ま。初學訓

○父母も對しつゝ。色を和げ氣を
下し。温和を主として事ふべし。家道訓

○父母長上教誡をるふことあらば。
首哉垂れし之を聴くべし。妾りし

自ら議論をなからず。朱子

第二章 交際

○人亦交するも厚きを旨とを。厚
起とい人哉責めどして。我を責む
るあり。大和俗訓

○己を責むれを身修まふ。人哉責
めどい恨みらるるこそやな。同上

○人我犯うさむることも易く。人乃我を犯せども報ひざるふやも難し。同上

○人れ心を知りて後交るるを。知るとぞ志く友とを。禮は後悔有り。大和俗訓

○西諺ふ曰く。交る友を見て其人品を識れ。

○高尚なる品行の人と共に居る。其身を高處より引上げあらる。を覺ゆ。品行論

○善人我見て之を敬む。不善人を見て之を改む。善と不善と。皆吾が師なり。傳家寶

○西諺ふ曰く。惡人より愛せらるる

教も悪まるいよで危し。

○誇るふとを休よ。我能く人み勝ふ。我も勝る者もまると多し。傳家寶

○他人の長短を論せんと欲せむ。先づ自己れ長短如何を顧よ。願體集

○人を害するれ心も有るづらば。人を防くの心い無教をからず。

同上

○陸宣公曰く。寧ろ人の我み負くとも。我も人み負くこと勿れ。

○貧極りて儉約せざる人も。親を交ふをのろむ。願體集

○富てい貧き者を忘まむ。貴くくも賤き者を侮らず。初學訓

○富む時親まず。貧き時疎せざる
 也。真乃大丈夫なり。富む時進む。貧
 死時退くハ。真此小人なり。願體集

○程子曰く。富貴みして人ハ驕る。
 固より善からび。學問して人ハ驕
 る。害も亦細ならず。

○不肖を以て人を待つ愚者や。雖

之甘ぜむ。非禮哉。以て人を處す。賤
 者と雖も亦怨む。習是編

○西諺亦曰く。無益の爭論を勝つ
 益なく。負つよ益あり。

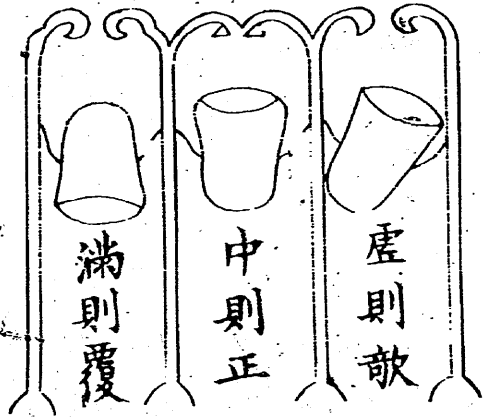
○スエールス曰く。自其身を恭敬
 をばる者も他人より恭敬を受く
 ること能わざ

○人と約せむ信を失ふふと勿れ。
一度信を失ふむ。人ふ非ぞと思ふべし。大和俗訓

○若し其事。義ふ協せず。或ハ力及むべんば。始よ里約と結ぶべし。む。同上

○省心録ふ曰く。和けば仇なく。恐

魯廟歌器



ハ辱るし。

○徑路窄き處を過きむ。須らく一歩を譲りて。先づ人を通はす。願體集

○西諺ふ曰く。文の爲めは勞を禮

大和俗訓

大和俗訓

ば。友乃情哉増と。

○良友を吾身の寶庫なり。若し之を得んと欲せば。惠愛信義を以て人と交るべし。勸懲雜語

第三章 言語

○人れ過を吾が心ふ之を知るも。妄言小口小出をなすららず。大和俗訓

○人を誹ふは不仁なり。且吾ふ於て益なし。人とし之を聞うを甚ど害あり。同上

○人れ譏まば。人又吾を譏る。人を誹ふ。即ち自ら誹るな事。同上

○君子を人乃善を揚げて人の惡を隠くし。人れ長ざる所を取り。短

き所哉言をい。同上

○口を開き多く人を誦るも。第一の
輕薄なり。唯徳を失ふのみならず
亦我が身を失ふ。傳家寶

○只己の是を説く者も。其心粗小
し。其氣浮ぶるなり。同上

○郷里人物の長短を論じ。鄙俚無

益の談を爲ること勿れ。玉種遺規

○佐藤一齋白く。凡そ人々語ふは。
彼をして其所長を説くしむべし。
我小於て益有り。

○前人比長短を説くは。こと勿れ。自
家乃背後不眼あり。小兒語

○孔子曰く人乃惡を稱する者哉

悪之。下流に居て上を訕る者を惡
也。

○子貢曰く。是の邑に居て冬。其大
夫城非らざる。

○荀子曰く。人を傷るの言は矛戟
より甚し。況や紙筆の形をとや。

○人の過を諫むるも誠あまり有

りて辭足らざるを善といひ。大和俗訓

○世に虚言多し。虚言は信なく人
の語をい。吾も亦虚言の責を免れ
む。同上

○喜ぶ時に言を多く信を失ひ。怒
る時の言を多く體が失ふ。傳家寶

第四章 學問 立志

○禮記小曰く。玉琢うざまじ器を成さじ。人學ばじれを道を知らじ。
○孔子曰く。朝は道哉聞けを。夕は死すとも可なり。

○光武曰く。志ある者を事竟よ成る。

○傳家寶よ曰く。男子志を死も鈍

鐵の鋼なきが如し。

○佐藤一齋曰く。志を立つるの功を耻を知るを以て要とす。

○荀子曰く。其人とありや。暇の日多け禮を人よまさるふと遠くらじ。

○顔之推曰く。光陰を惜むべし。諸

まこと逝水不壁ふ。

○西諺亦曰く。今日れ後亦今日を
し。又曰く今日乃一時を明日の二
時よりも貴し。

○程伊川曰く。學ぶ者も必は師を
求む。師を求むることや。慎まげらるべ
あらむ。

○道を教ふるは師を其恩尤重し。
君父と同しく貴ぶを初學訓。

○技藝の師も亦我に恩あり。敬重
をさふへうらず。同上

○良田萬頃も一藝の身不在るよ
ハ如くむ。願體集

第五章 儉約 安分

○管子曰く。人情

を以て侈まば貧し。

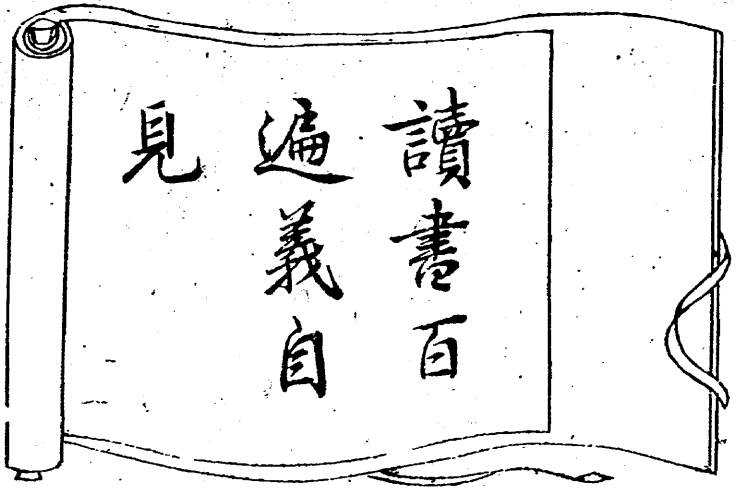
力めて儉るれを

富む。

○倍根^{ベイゲン}曰く。節儉

の要道也。小利よ

意を注ぐよりハ



讀書百

遍義自

見

寧ろ小費を省くふ如くべ。

○スマイルス曰く。節儉も家事を治

むるに精神あり。

○我孫^{ニゴロシ}曰く。儉約も。安静の基礎を

るのこゝらび。又仁恵の根源あり。

○分母過ぎて福を求むまば却て

禍哉招くべし。傳家寶

○分ふ安ド。禍ふ遠ざらまへ。自ら福を得べし。同上

○足ることを知る者多。身貧しけ程どえ心富む。得ふふやを貪る者も。身富めども心貧し。同上

○禮記ふ曰く志を満るらむを樂とも極むべのらむ。

第六章 生業

○朝早く起くるは家の榮ゆる兆なり。晚く起くるも家此衰ふる基あり。

○リットン曰く。金銭ハ人の品行を關す。金銭乃事を決して輕率をなすこと勿き。

○富爾拉フルラ曰く。正經の職業を有つ
人の卑賤を愧つること勿き。有た
ざる人亦や愧つづけれ。

○西語小曰く。金を借りよ往く者
も。憂を取ア小往く者なり。

○西語小曰く。利子を取んよア利
子を出さること勿き。

○古語小曰く。勤めハ貧き小勝ち。
慎シハ禍ハ勝つ。

○西語小曰く。狡猾よて財を得き
も。名望を失ふ。

○又曰く。愚者も妻りよ財を貯へ。
智者も適宜小財哉用ぬる。

○古語小曰く。廉士も財を愛せよ

るは非也。之を取ることを道は由ふ。
○一日の飯錢喫せむ。一日乃飯錢
を得るふやを計るをし。必を虚し
く費をこと勿ま。願體集
○佐藤一齋曰く。信を人は取まむ。
財の足らざることをなし。

第七章 改過

○孔子曰く。過ては。改むるを憚る
大と勿れ。
○又曰く。過て改めざる。是を過と
謂ふ。
○左傳子曰く。人誰う過るあらん。
過て能く改れば。善ふきより大なるも無し。

○西諺曰く。歡樂も少き時より己の過を知る者有りあり。

○韓退之曰く。人其過を知らざるを患ふ。既ふ之を知りて改むること能むべし。是勇なき也。

○西諺曰く。少壯時の過失を。老て後悔とる。

○陸桴亭曰く。過を改むる乃人も天氣の新ふ晴るが如し。我自ら快し。人之を見るも亦喜めべし。

第八章 躬行

○凡そ一念惡を思ひ。一事惡を行へむ。天道不背也。恐るを初學訓。

○善を爲さくことを易く。善哉行ひ。

其名を求むるは難し。是誠此善
なり。大和俗訓

○信を心よ誠あるなり。心満こぞ
何れを。言行の上りあらざる。五常訓

○人乃心信實をるは。萬事の基ふ
一と人ふ交るは道あり。同上

○若し信をけれを。萬事都て偽り



なり。人ふ交りて
何如か善るるべ
き。同上

○薛文清曰く。人
を感志むる能を
けるは。皆誠乃求
むるに至らざる也。

○善も小ふして益なると謂ふを
か屍を。不善も小ふして傷をなし
と謂ふをあらむ。賈誼新書

○西諺曰く。一身に品行も。其危
難を防ぐこと。一隊の兵馬より
勝まり。

○スマイルズ曰く。人の此世は在

る。真正の權勢と稱をべき者を。品
行あり。

○薛文清曰く。日用の間。纖毫の事
も皆當さよ。謹慎をべし。

○鹵莽ふして煩悩厭ふ者も。決し
て成る乃理あり。呂氏童蒙訓

○費元祿曰く。能く煩悩耐へば。天

下何事ヲ爲さべからざらん。

○西語ヨ曰ク。出ると死ハ爲づま
まことを思ひ。歸るやまを爲たるこ
や。哉思フ。

○人驕まば志昏。志昏けまば計
短。傳家寶

○名を成まへ。毎小窮苦の日。在

り。事を敗るハ。多く得意れ時。因
ふ。同上

○錢あらば。常ル錢なきの日を想
フ。安樂ならむ。常ニ病患死時を思
フ。同上

○西諺小曰ク。悦樂を。勉強小因て
得る所乃賞典なり。

○セシル曰く。多くの事を為さず。捷徑の他をし。即時より一事を為さず。

○西語母曰く。真正の事業を工夫。費用のるれ。勇るる。非をんを。得るをらさず。

○古語小曰く。莫大に禍を。須臾の

恐びづるよ起る。

○孔子曰く。人遠き慮りなげき。必を近き憂あり。

○一言に過も。莫大の禍となり。一事の失を。終身の憂とみる。慎まざるべからず。大和俗訓

○西語小曰く。一年善ならざらば。

七年の憂を招き。

○魏環溪曰く。世間第一敬をべたの人。忠臣孝子あり。世間第一憐むべきの人。寡婦孤兒あり。

○人乃聞ことなまふを欲せむ。言ふこと勿れ。人の知るふと生死ことを欲せば。爲ること勿き。願體集

○陸桴亭曰く。天下何事か怒り不因る錯らざらん。怒れを忙し。忙しければ錯る。

○程漢舒曰く。人乃錯まる處を見らば。時々我身を返り観るべし。

○君子を人哉。勸めて訟を息め。小人を人を激して訟を起さし。

ひ。願體集

○身を終るまで路を譲まじとも。百歩と枉げば身を終るまじ。畔城譲れども一段を失いど。同上

修身兒訓卷之二終

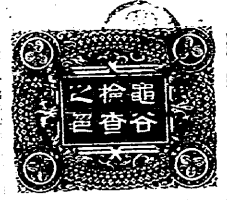
明治十三年十一月廿五日版権免許
明治十七年十二月卅一日再板御
定價金五錢五厘

東京神田區金澤町十一番地

元風社長

總發行

編輯并出版人



分板人

大阪南区北橋谷町五十七番地
浪華文會主

日柳政憲

